

黄金の鹿物語

——『ボーディサットヴァ・アヴァダーナ・カルパラター』第30章和訳——

引田弘道・大羽恵美¹⁾

あらすじ

- ①善行を考えると、言葉に出ないほど感激する。(1)
- ②デーヴァダッタに関連した過去世の出来事。(2)
- ③王妃の正夢物語。ヴァーラーナシー国のマヘンドラセーナ王とチャンドラプラバー王妃。(3-4)
- ④スヴァルナパールシュヴァという名の黄金の鹿の描写。
- ⑤鹿は友の鳥と共に人里離れた森で暮らす。彼らは人間の言葉を話す。(5-10)
- ⑥縛られたまま川に流されたクティラカは溺れそうになり助けを求める。鹿は慈悲心から彼を助けようとする。(11-13)
- ⑦鳥の忠告。(14-15)
- ⑧金色の鹿、鳥の忠告にもかかわらず川に流された男の縄を角で解いて救う。自身の存在を誰にも言わないよう男に依頼。男の約束。(16-19)
- ⑨王妃は夢で見た金色の鹿を王に話す。王は獵師たちに報奨金を与えて鹿を発見させようとする。(20-23)
- ⑩獵師たちは黄金の鹿を発見できず、鹿の像を作るよう王に進言。(24-28)
- ⑪クティラカは鹿との約束を破り、報奨金欲しさに王に鹿の居所を告げる。王は兵士を伴い、彼を先頭にして出発。(29-32)
- ⑫王の軍隊が迫ったのを見た鳥、忠告を無視して恩知らずの獵師を助けた鹿を非難。(33-39)
- ⑬鹿王、他の鹿を助ける為に身を投げ出す決心をする。(40-42)
- ⑭クティラカ、両手で鹿の居所を王に示した途端、両手が落ちる。(43-45)
- ⑮王は鹿を自らの都に招き、自身の玉座を与える。
- ⑯鹿の説法。(46-49)
- ⑰過去世と現在世との結合。黄金の鹿は仏陀、クティラカはデーヴァダッタ。(50)
- ⑱この物語を聞いた比丘たちの功德。(51)

他の文献との比較

対応する文献として以下のものが指摘されている。

- a) パーリ『ジャータカ』No. 482 Ruru-jātaka 「ルル前世物語」(PTS Jātaka, vol. 4, pp. 255-263)²⁾
- b) パーリ『チャリヤーピタカ』(PTS *Buddhavaṃsa and Cariyāpīṭaka*, new edition by N. A. Jayawickrama, 1974, II-6; pp. 18-19)
- c) サンスクリット『ジャータカ・マーラー』(pp. 167-175)
- d) 『六度集経』巻6 (大正3, 33a-b)

- e) 『九色鹿経』〈支謙訳〉(大正3, 452b-453a)³⁾
- f) 『根本説一切有部毘奈耶破僧事』巻15 (大正24, 175a-176b)
- g) 『菩薩本縁経』(大正3, 66c-68b)

その他『方広大莊嚴経』巻5 (大正3, 566b)にも金色の鹿が河に漂う人を見て、慈悲心から助けたにも拘わらず、反対に危害を加えられたが、恨みを持たなかった、という簡単な記述がある。

次にモチーフごとに分解した以上の内容を、対応する他の文献と比較対照してみる。①から⑱は先の『カルパラター』の順を示す。

a) Ruru-jātaka (Jātaka, No. 482)

- ①なし。
- ②恩知らずの (akataññū) デーヴァダッタに関連した過去世の出来事。
- ③ヴァーラーナシー国のブラフマダッタ王。
- ④ルルという名の黄金の鹿の描写。
- ⑤マンゴー林で一人で暮らす。
- ⑥放蕩息子のマハーダナカ (Mahādhanaka), 借金に首が回らなくなり、ガンジス河に身を投げる。鹿は男の悲鳴を聞いて助けようとする。
- ⑦なし。
- ⑧鹿は流れを横切って進み、男を背中に乗せて (pitṭhiyaṃ āropetvā) 岸辺にたどりつく。自身の存在を誰にも言わないよう男に依頼。男の約束。
- ⑨ケーマ (Khemā) 王妃は夢に金色の鹿が法を説くのを見る。王に鹿の搜索を依頼。見つからなければ死ぬと言う。王は黄金の板に (suvannapattē), 黄金の鹿の居所を教えた者には多くの褒美を⁴⁾与えると書いて、それを大臣にふれ回らす。
- ⑩なし。
- ⑪マハーダナカは大臣と一緒に王のもとへ行き、鹿の居所を報告し、褒美を要求する。クティラカは鹿との約束を破り (mittadūbhissa), 報奨金欲しさに王に鹿の居所を告げる。王は彼を道案内 (magga-desakam katvā) として供を連れて鹿のもとに行く。
- ⑫なし。
- ⑬なし。
- ⑭マハーダナカは手を伸ばして (hattham pasāretvā) 鹿の居所を教える。
- ⑭-1 軍に取り囲まれた鹿は王の居場所だけが安全だと考え駆け出す。鹿は人間の言葉を話す。
- ⑭-2 鹿は王に誰が自身の居所を教えたのか問う (... rājānaṃ pucchi: “ko nu te idham akkhāsi: etth’ eso tiṭṭhati migo” ti.)。王から聞いた鹿は、この男を助けるより漂流した木片の方がましだと⁵⁾、その裏切り者を非難。王もその男を殺そうとする。鹿による制止。
- ⑭-3 「自身を始め、一切の生類に安心立命を与える」⁶⁾ことを鹿は王に願う。王の約束。
- ⑮王は鹿を自らの都に招く。
- ⑯鹿の説法。「十の王法」(dasahi rājadhammehi)。
- ⑯-1 鹿たちが穀物を食べ放題にする。民衆の困惑。王は約束を守り、駆除しようとしめない。黄金の鹿は他の鹿たちに穀物を食べないように命じる。
- ⑰過去世と現在世との結合。長者の息子はデーヴァダッタ、王はアーナンダ、ルル鹿は仏陀。
- ⑱なし。

b) 『チャリヤーピタカ』

- ①なし。
- ②なし。
- ③なし。
- ④ルルという名の黄金の鹿の描写。最高の戒 (sila) を具足。(1)
- ⑤鹿はガンジス河の岸の人里離れた森で暮らす。彼らは人間の言葉を話す。(2)
- ⑥債権者によって (dhanikehi) 悩まされ、ガンジス河に落ち、流されながら助けを求める声を鹿は聞く。慈悲心 (karuṇā) に動かされ、鹿は男に誰かと尋ねる。男の説明。鹿は夜中に命を顧みず河に飛び込み、男を救う。(3-5)
- ⑦なし。
- ⑧鹿は夜中に命を顧みず河に飛び込み、男を救う。鹿は自身の存在を誰にも言わないという願いをする⁷⁾。(6-8)
- ⑨なし。
- ⑩なし。
- ⑪男は町に帰ると、金欲しさに王に鹿の居所を告げ、王を鹿の近くまで連れてくる。(9)
- ⑫なし。
- ⑬なし。
- ⑭なし。
- ⑭-1 なし
- ⑭-2 鹿から顛末を聞いた王は弓を番え、友を裏切った (mittadubbhim) 男を殺そうとする。鹿による制止。(10-11)
- ⑮なし。
- ⑯なし。
- ⑰なし。
- ⑱なし。
- ⑲なし。
- ⑳なし。

c) 『ジャータカ・マーラー』

- ①他人の苦しみこそ善人たちの苦しみ。それは耐えられないが、自分の苦しみはそうではないから。
- ②なし。
- ③なし。
- ④人間と出会うことのない大きな森に、純金のような輝く色の、ルルという種類の鹿が (rurumrgo babhūva) いた。
- ⑤なし。
- ⑥流れの速い川に流された男の助けを求める声を鹿は聞く⁸⁾。
- ⑦なし。
- ⑧鹿は河に飛び込み、男を自身の背中に乗せて助ける⁹⁾。岸に着くと、帰り道を示して去るように言う¹⁰⁾。男は感謝の気持ちを表そうと何か命じてくれるよう頼む¹¹⁾。鹿はこの恩を忘れず、誰にも鹿によって救われたと公言しないよう依頼¹²⁾。男の約束 (pratiśrutya)。

- ⑨王妃は正夢 (satya-svapnā) を見る。そこでは鹿が人間の言葉で説法¹³⁾。夢の内容を王に話す。王は上等の村と10人の美女を鹿の居所を教えた者に与えるという触れを (ghoṣaṇām) 出させる。
- ⑩なし。
- ⑪触れを聞いた男の心の悩み。欲望と鹿の恩に心が揺れる¹⁴⁾。結局報奨金欲しさに王に鹿の居所を告げる。王は兵士を伴い、彼を道案内にして¹⁵⁾出発。
- ⑫なし。
- ⑬なし。
- ⑭男が腕を上げて鹿の居所を王に示した途端、手が手首から剣で切り落とされたように落ちる。これは悪業の果報があつという間に生じたため¹⁶⁾。
- ⑭-1 軍に取り囲まれたと認識した鹿は人間の言葉で王に話す。
- ⑭-2 鹿は王に誰が自身の居所を教えたのか問う¹⁷⁾。王は男を矢の先で示す。鹿は、恩知らずを助けるより漂流した木片を引き上げる方がましだと言う¹⁸⁾。王はその男を殺そうとする。鹿による制止¹⁹⁾。
- ⑭-3 王は自身の領土で好きなだけ動いても良いという恩恵 (prasādaḥ) を鹿に与える。
- ⑮王は鹿を自らの都に招き、自身の大獅子座に (simhāsane) 座らせる。説法の依頼。
- ⑯鹿の説法。法 (ダルマ) とは一切衆生への慈悲心 (dayā)²⁰⁾。王は一切の獣や鳥に安全を (abhayaṃ) 与えた。
- ⑰なし。
- ⑱なし。

d) 『六度集経』

- ①なし。
- ②なし。
- ③なし。
- ④修凡という名の九色の体毛の鹿。
- ⑤川の辺で暮らす。
- ⑥溺れた人の助けを求める声を聞き、鹿は危険を顧みず救おうと決心。鹿は人に「恐れずに、私の角を持って背中に跨れ。」という。
- ⑦なし。
- ⑧救われた男、感謝の念で、下僕として一生鹿の世話をすると申し出る。鹿は立ち去るように言い、鹿を探すがいても、自分を見たと言わないように依頼。男の承諾。
- ⑨国王の名は摩因光、王妃の名は和致。夢で九色の体毛の鹿を見、鹿の皮と角で自分の衣服や耳飾りを作りたいと思い、捕らえられないと王妃は死んでしまうと王に言う。王は臣下たちを召し、鹿を見つけた者には一つの県と金鉢に一杯の銀の粟、銀の鉢に一杯の金の粟を褒美として取らせるとの触れを出させる。
- ⑩なし。
- ⑪溺れた男は褒美欲しさに王宮に行って鹿の居所を告げる。
- ⑪-1 彼の髭面に疥癬が出来、口は腐った臭い。
- ⑫鹿と友達の鳥、王の軍隊がやって来たのを見て、眠っている鹿を目覚めさせる。
- ⑬鹿王、王の前に駆け寄る。
- ⑭なし。
- ⑭-1 ⑬と同じ。

- ⑭-2 鹿は王に誰が自身の居所を教えたのか問う。王から聞いた鹿は、今までの顛末を王に報告。報恩感謝の心のない男を非難。
- ⑭-3 王は「今日以降、鹿は欲しいまどこでも草を食むことが出来、妨げる者は死刑に処すと命令。
- ⑭-4 王妃、怒りのあまり死ぬ。
- ⑭-5 帝釈天は王の決心を確かめようと、多くの鹿を現出し、穀物を食べさせる。国中の人々の訴え。王は約束を守り、鹿を殺させない。感激した帝釈天は鹿たちを去らせ、穀物を十倍とする。
- ⑯なし。
- ⑰過去世と現在世との結合。黄金の鹿王は仏陀、鳥は阿難、王は鷲鷲子（舍利弗）、溺れた者は調達（デーヴァダッタ）、王の妻は調達の妻。
- ⑱なし。

e) 『九色鹿経』

- ①なし。
- ②なし。
- ③なし。
- ④九色の体毛の鹿。その角は雪のように白い。
- ⑤恒川の辺で暮らす。一羽の鳥と知り合い。
- ⑥上流から人が流され、天に助けを求める彼の声を聞き、鹿は危険を顧みず救おうと決心。鹿は人に「恐れずに、私の背中に跨って両角を持て。」という。
- ⑦なし。
- ⑧救われた男、感謝の念で、下僕として水草を採取し鹿の世話をすると申し出る。鹿は立ち去るように言い、恩に報いたければ、ここに居る鹿のところまで手引きしないように依頼。男の承諾。
- ⑨国王夫人、夢でこの鹿を見、鹿の皮で敷物を、角で扠子の柄を作りたいと願って、起き上がらない。捕らえられないと王妃は死んでしまうと王に言う。王は「鹿を捕まえた者には王国の半分と金の鉢に一杯の銀の粟、銀の鉢に一杯の金の粟を褒美として取らせる。」との触れを出す。
- ⑩なし。
- ⑪溺れた男は褒美欲しさに、鹿との約束を守らず、王宮に行って鹿の居所を告げる。
- ⑪-1 彼の顔に疥癬（癩瘡）が出来る。
- ⑫鹿と友達の鳥、王の軍隊がやって来たのを見て、眠っている鹿を目覚めさせる。
- ⑬鹿王、国王の前に駆け寄る。
- ⑭なし。
- ⑭-1 ⑬と同じ。
- ⑭-2 鹿は王に誰が道案内したのか問う。王は顔に疥癬の出来た男を指す。鹿は今までの顛末を王に報告。恩に報いない男を助けるより、水に浮かんだ木を背負った方がましだという（人無反復。不如負水中浮木）。
- ⑭-3 王は「今日以降、この鹿を駆逐する者がいれば、彼の五族まで罰する。」という触れを出す。数千の鹿が集まり水草を食むが穀物は食べない。
- ⑯なし。
- ⑰過去世と現在世との結合。黄金の鹿王は仏陀、鳥は阿難、王は悦頭檀、溺れた者は調達、王の妻は先陀利。
- ⑱なし。

f) 『根本説一切有部毘奈耶破僧事』

- ①なし。
- ②恩知らずの(無恩無報之行)提婆達多(デーヴァダッタ)に関連した過去世の出来事。
- ③王妃の正夢物語。波羅痲斯(ヴァーラーナシー)国の大帝釈軍(マヘンドラセーナ)王と月光(チャンドラプラバー)王妃。
- ④金色で、美しい鹿王、獵師を恐れて身を隠す。
- ⑤鹿に鳥の友がいる。鹿は昼の獵師を恐れ、鳥は夜のこのはずくを恐れる。
- ⑥二人の敵対者が偶然出会い、力で勝った方が相手を縛り、河に投げ込む。男は溺れそうになり助けを求める²¹⁾。鹿王は500頭の眷属と河の水を飲んでいたが、この声を聞いて慈悲心を起こし、河に入って助けようとする。
- ⑦鳥の忠告。この男は恩知らずだ²²⁾。
- ⑧鹿王は鳥の忠告にもかかわらず溺れた男を背中に負い、河から助け出す。口で縄を解き、蘇生させる。男は召使として鹿に仕えたいと申し出る。鹿王の願いは自身の存在を誰にも言わないこと²³⁾。男の約束。
- ⑨王妃は鹿が獅子座に座り説法している姿を夢に見、これが正夢になると²⁴⁾喜んで目が覚める。このことを王に話す。王は臣下に獵師たちを集めて鹿を発見させる。
- ⑩獵師たちはそのような鹿を見たことも聞いたこともないと言う。王は臣下に鼓を撃って、鹿の居所を教えた者には500の村を報奨として与えるという触れを出させる。
- ⑪男は鹿との約束を破り、報奨金欲しさに王に鹿の居所を告げる。王は兵士を伴い、彼を先頭にして²⁵⁾出発。
- ⑫高い木の上において、王の軍隊が迫ったのを見た鳥、忠告を無視して恩知らずの獵師を助けたと、鹿を非難²⁶⁾。
- ⑬鹿王、他の千頭の鹿を助ける為に、自分は死んでも良いと考え、自ら国王の下に行く。
- ⑭昔溺れた男、遠くに鹿王を見ると、両手を挙げて指示し、「そこに居るのが彼の金色の鹿王だ。」²⁷⁾と言う。手で鹿を指した途端、手が地に落ちる。悪業の果報は来世まで待つ必要はなく、すぐにもで果を受ける場合もある²⁸⁾。この溺れた男が恩知らずで、悪業をなしたのがそれに該当²⁹⁾。
- ⑮王は都を莊嚴し、鹿を先頭にして自らの都に招き、自身の獅子座に座らせる。
- ⑯鹿の説法。王、王妃等、鹿を囲んで教えを拝聴する。皆五戒を受けることを望む。国王は今からは殺生を断ち、狩猟を止めさせ、有情が恐怖を感じないようにすると鹿王に誓う³⁰⁾。
- ⑰過去世と現在世との結合。黄金の鹿は仏陀、溺れた男は提婆達多。
- ⑱なし。

g) 『菩薩本縁経』

- ①なし。
- ②なし。
- ③なし。
- ④「金色鹿」という名の鹿王の描写。「両脇金色」(66c)と『カルバラター』の題名と同じ表現あり。
- ⑤鹿王は無量の鹿を将導し、慈悲行を積み、雪山に暮らす。人気のない場所で「遠離諸悪、修行善法」(66c-67a)の教えを説く³¹⁾。
- ⑥鹿王は河に流されて助けを求める声を聞き、自らの命の危険を犯して、慈悲心から彼を助けようとする。

- ⑦なし。
- ⑧鹿は男に今から助ける³²⁾と約束。溺れた男を背中に乗せ岸に上げる。男の感謝。「知恩や念恩を賢聖は讃え、不知恩はこの世の悪名である。そのため鹿のことを気にかけるなら口を謹んで³³⁾、自身の存在を誰にも言わないよう男に依頼。男の約束。
- ⑨なし。
- ⑩なし。
- ⑪恩知らずの男（忘恩背義）は目先の利益のため、王に美しい鹿を見た、その場所を知っていると言う。王は車に乗り³⁴⁾、先頭に立つ。他の兵士は後ろから随う。
- ⑫王の軍隊が迫ったのを見た鳥、鹿王の耳を啄ばんで眠っている鹿を目覚めさせる。
- ⑬鹿王、他の鹿を助ける為に身を投げ出す決心をする。
- ⑭溺れた男、王にこれが私の言っていた鹿だ³⁵⁾と言った途端、彼の両手は地に落ちる。王は両手が落ちた原因を鹿王と溺れた男本人に尋ねる。
- ⑭-3 王は鹿王に帰依し、弟子になることを誓う³⁶⁾。また臣下に狩猟を禁止すると命じる³⁷⁾。
- ⑮なし。
- ⑯鹿の説法の内容は王とのやり取りの中に認められる。
- ⑰なし。
- ⑱なし。

モチーフの検討

以上、a) から g) までの7つの文献を概観した結果、いくつかのモチーフが認められた。それらは複数の文献に共通するものと、独自のものとがある。すなわち、デーヴァダッタ、鹿の名前、王と王妃の名前、王妃の夢の内容 鹿が法を説く

記述がある場合は○、ない場合は×

	BAK	a	b	c	d	e	f	g
デーヴァダッタ	○	○	×	×	×	×	○	×
鹿の名前	○	○	○	○	○	×	×	○
王と王妃の名前	○	○	×	×	×	×	○	×
王妃の夢の内容 鹿が法を説く	○	○	×	○	×	×	○	×
鳥の忠告	○	×	×	×	×	×	○	×
鳥が鹿を目覚めさせる (△は忠告を聞かなかった鹿に対する鳥の非難)	△	×	×	×	○	○	△	○
溺れた男の名	○	○	×	×	×	×	×	×
報奨金	○	○	○	○	○	○	○	○
両手の剥落 (△は顔に瘡瘍ができる)	○	×	×	○	△	△	○	○
忘恩者より木や草を掬い上げた方がました	×	○	×	○	×	○	×	×
王による鹿の保護	×	○	×	○	○	○	○	×
鹿の説法	○	○	×	○	×	×	○	○
王の帰依	×	×	×	×	×	×	×	○
鹿と穀物	×	○	×	×	○	○	×	×

の名前、王妃の夢の内容、鳥、溺れた男、男が王に鹿の存在を告げた理由、両手の剥落、鹿は自身の居場所を誰が告げたのか王に質問、忘恩者より木や草を掬い上げた方がましだという表現、王による鹿の保護、鹿の説法、鹿と穀物である。

以上から判明することは、『カルパラター』(BAK)はf)の『根本説一切有部毘奈耶破僧事』に一番近いということである。特に鳥の忠告と非難は他の文献にはなく、両文献のみにある共通要素である。またデーヴァダッタを恩知らずとして非難する記述は、パーリ、『ジャータカ・マラー』、『六度集経』などには認められず、ある意味、有部の特徴であるような印象を受ける。

参考文献

Speyer, J. S. 1895 *Jātakamālā or Garland of Birth-Stories by Aryasūra translated by J. S. Speyer.*

『日本古典文学体系22 今昔物語集1』岩波書店、1959年

干潟龍祥・高原信一 1990 『ジャータカ・マラー—本生譚の花蔓』(インド古典叢書) 講談社。

和 訳

善行を考察すると感激のあまり、何も言えなくなる

善性の精髓に正直であり、善良で功德のある性質の人は誰であれ賞賛すべきであり (ślāghyah)³⁸⁾, ダルマの道を進む障害となり、全くの恩知らずは誰であれ、非難すべきである。善き行いを長い間考えて、(喜びで) 繰り返し身の毛がよだつことが蓄積した人は一様に、目に涙をためてその(善行の)描写に口をつぐんでしまう。(1)³⁹⁾

過去世の出来事

以前、デーヴァダッタに関連して比丘たちに問われた世尊は、前世の出来事に基づいた話をされた。(2)⁴⁰⁾

マヘンドラセーナ王とチャンドラブラバー王妃

ヴァーラーナシーに (Vārāṇasī) マヘンドラセーナ (Mahendrasena: dbang po'i sde chen) という名の王がいた。

彼の繁栄によって (lakṣmī: dpal gyis), 全ての王たちは恥じいって (vilakṣatām: skyengs pa) しまった。(3)

彼には、チャンドラブラバー (Candrabrahā: zla ba'i 'od) という、神の名声のような王妃がいた。彼女の夫⁴¹⁾の力によって、彼女の夢は現実のものとなった。(4)

黄金の鹿と鳥

その時、森に鹿の群れの主がいた。

スヴァルナパールシュヴァ (Suvarṇapārśva: gser gyi logs 「黄金の腹を持つもの」) という名前で、皮が黄金色であった。(5)

サファイアを(黒目として)内蔵し、大きな⁴²⁾真珠の首飾りにも似た(白目の)輝きのある、その(鹿の)視線の光⁴³⁾は森の輝きの飾りであった。(6)

若芽の蔓のような角⁴⁴⁾を持ち、色とりどりの宝で覆われた皮をした、彼の輝きは、奇跡の甘露の海の大波のように、きらめいた。(7)

菩薩の化身のような彼の身体は美しかった。

というも、前世で善行に彩られた者の(現世の)特徴は美形であるから。(8)

彼の仲間に遠くまで見渡せる年老いた鳥がいた。

狩人の探索を恐れて、あちこち見回すことに専念していた。(9)

彼ら両者は互いに話をして喜び、人里離れたところで時を過ごした。

前世の功德によって、獣ではあるが(彼らに)人間の言葉が生じた。(10)

金色の鹿、鳥の忠告にもかかわらず川に流された男を救う

ある時、その群れの主は従者らと共に水を求めて、

竹⁴⁵⁾で囲まれた川の中州に近づいた。(11)

彼はそこで大きな強い流れに運ばれながら、敵によって縛られて水に投げ込まれて嘆いている人を見た。(12*)⁴⁶⁾

彼(の男)のより大きく、長く続く悲嘆の声を聞くと、

全ての鹿たちは首を回転して大慌てで逃げた。(12)

その時、スヴァルナパールシュヴァは慈悲の縄で捉えられ、

矢によって急所を射抜かれたかのように、同じその場所に動かずにいた。(13)

その(男)を救い上げようとしている彼の鹿を見て、遠くまで見渡せる⁴⁷⁾鳥が言った。

「友よ、この努力はあなたに相応しくない。(14)

困難な時には花のように(もろく)、目的が達成されれば、金剛のように(硬い)、

彼ら悪人たちは自分の身体のみを友として恩義を考慮しないものだ。」(15)

このように鳥によって制止されたものの、慈悲にあふれた誠実な彼は、

急いで川に飛び込んで彼を救った⁴⁸⁾。(16)

彼(の鹿)は怖がることなく、両角によって束縛の縄をほどくと、

足元にひれ伏して今にも逃げようとしている哀れな彼(の男)に言った。(17)

「友よ、君は私がここにいることを誰にも話してはいけない。

皮を欲しがる狩人たちは金色の私を欲しがる。」⁴⁹⁾(18)

このように彼(の鹿)によって丁寧に言われると、クティラカ(Kuṭilaka-: gya gyu can 「ひねくれ者」)

という名の彼は、

「分かりました。」と言って称賛の言葉を語り(prastuta-stutih: bstod pas bstod)、挨拶をして去った。(19)

王、王妃が夢で見た金色の鹿を探す

その間、王の妃であるチャンドラプラバーは、夜に、

鹿が座に就いて善きダルマを説くのを夢で見た。(20)

正夢(だと考えた、satya-svapnā: bden rmi)彼の王妃は目覚めると王に言った。

「王様、私は夢で奇跡のような金色の鹿を見ました。(21)

私は現実にその鹿がやって来るのを見たく思います。

(その鹿は)まるで月蝕を恐れて、月にある印から逃げ出たかのようです。」⁵⁰⁾(22)

このように王妃によって愛情をもって言われると、

王は彼女を喜ばせようと⁵¹⁾、報奨金を与えて、狩人たちを鹿を捕えるために派遣した。(23)

獵師たち、黄金の鹿を発見できず

それから、彼ら狩人たちは森を探してから帰ってきた。

何の成果もなく帰ってきたことに怒った王に（彼らは）震えながら言った。(24)

「王様、世界をあるだけ動き回って⁵²⁾、探索しました (vicitā nicitācalaiḥ)。

私達は留まることなく動き回りましたが (bhrāntā vayam avīśrāntā), そのような鹿を得られませんでした⁵³⁾。(25)

奇跡のような完成品で（私たちの）目を奪うような、美しい目をした、

夢の中の完璧な姿を持つ、この金色の鹿はどこにいるのでしょうか。(26)

王様、もしお心がそのような気晴らしに満足するのなら、

熟練した、ある名工たちに金色の鹿を作らせなさい。」(27)

このように聞いても、彼の王はさらに多くの報奨金を与えながら⁵⁴⁾、

鹿を探す目的に執着した。(28)

クティラカの企み

その後、クティラカは王が多くの（報奨金を）与えると聞くと、（王に）近づき、

獵師たちから報酬金を奪うことに貪欲な心をして（彼は王に）言った。(29)

「王様、お恵みをお与え下さい。私は鹿をお見せましょう。

森で私は最上の黄金の肢体を持つ鹿を⁵⁵⁾見ました。」(30)

これを聞くと、王は喜びで目を大きく見開いて、

「友よ、（私に）見せなさい。それはどこにいるのか。それはどこにいるのか。」と何度も尋ねた。(31)

鹿（のいる）道を示す彼（の獵師）を先頭にして、

月の昇った山のように、清らかな日傘のある王は、兵士を伴って出発した。(32)

忠告を無視した鹿を鳥は非難

さて、遠くまで見渡せる鳥は木の先において、

象や馬の大群でまき上げられた埃で、森が覆われているのを見た。(33)

鹿の群れの王のスヴァルナパールシュヴァに近づいて（鳥は）言った。

「以前に私が親切心から言ったことを君は聞かなかつたし、実行もしなかつた。(34)

私が反対しても君は彼の男に命を与えたが⁵⁶⁾、

他ならぬその男が武装した弓手と共にやって来たではないか。(35)

今や、恐怖が起こったのに、一体どこに行くべきか。何をすべきか。

どんな為になることに従うべきか、あるいは死に等しいのは何であろうか。(36)

この男は恩知らずで、残忍な行動をする、卑しく、罪に執着した者だ⁵⁷⁾。

ほかならぬ君が、自らを滅ぼして毒の樹を守る結果になってしまった。(37)

自分の身体を差し出す者さえ滅亡させてさもまだ満足しないのは、

生き物ともども大海を飲み込む忘恩の海底の火⁵⁸⁾のようだ。(38)

恩知らずな者への親切、ひねくれ者への信頼、

愚者への教訓、（これらは）行った者だけが悪いという結果になってしまう。」(39)

鹿王の決心

鳥が（鹿の）王に近づいてこのように語った時、
鹿の群れの主は、群れの為になることをする時がやって来たと考えた。（40）
「この兵士たちの軍隊は深い森に入るはずだ。
私の道連れとなって、あつという間に〈森から〉鹿が絶滅してしまうだろう。（41）
そのため、私自身が軍隊の長の近くに行こう。
私一人だけの殺戮があれ。あれらすべての鹿たちは生きるべし。」（42）

クティラカの罪と罰

このように決心して、彼の鹿は王の近くに行った。
【格言1】他の生命を守るためには、偉大な人の命は草のように取るに足らないものだ。（43）
彼（の鹿）が走って目の前にやって来たのを見て、クティラカは喜んだ。
これこそ彼に違いないと思い、速やかに両手で速くの⁵⁹王に指し示した。（44）
その瞬間、降り落ちる稲妻のような（vajreṇeva nipātinā: rdo rje lhung ba lta bu）、鳥の呪いの言葉によつて、
彼の悪の樹枝のような両手が落ちた。（45）

王、鹿を自らの都に招く

鹿に語られたその出来事を聞くと、王は驚き、
恩知らずの行動を責めるような言葉を口にした。（46）
さて王は、喜び、最上の力を使って、その鹿を、
より大きな丁寧さをもって自分の都に連れてきた。（47）
さて、王宮に到着すると、王は彼のために玉座を与え、
後宮の妃や大臣とともに彼（の鹿）の前に近坐した。（48）

鹿の説法

天界のような智慧を持つ菩薩である彼の鹿は、集まりの中で
教えを垂れた。それによって人々は学処を身に着けた。（49）

過去世と現在世との結合

前世の彼のスヴァルナパールシュヴァこそ、ほかならぬ私で⁶⁰あった。
残酷なクティラカは現在のデーヴァダッタである。（50）

比丘たちの賞賛

このように、存在への畏れを打ち砕く世尊によって語られた、
気高い本性に輝く者の、善行に相應しく⁶¹、賞賛に値する行動を
聞くと、比丘の集団は功德が熟して（生じた）区別知で輝き、幾分善行に向かった。（51）⁶²

作例解析

1. 「黄金の鹿物語」の作例について

解説にあるように、「黄金の鹿物語」に対応する物語は異なる言語によって著されており、これらの文献に基づいた絵画やレリーフなどの作例も各地に残っている。ここでは本稿に先立って発表された『カルパラター』第38章(チベット語訳では第39章)「クシャーンティ・アヴァダーナ」で言及した、チベット人祖師によって編集された文献に基づく絵画の作例について述べてから、『カルパラター』の蔵訳に基づいて表された軸装の絵画(タンカ)について解析を行う⁶³⁾。

チベットでは、34章からなる『ジャータカマーラー』に後半部を加えて百話とした『ジャータカ百話』(skyes rabs brgya rtsa)が編纂されており、それを典拠とした絵画が残っている。「黄金の鹿物語」も、『ジャータカマーラー』に所収されているために、『ジャータカ百話』の中に内容を同一にするチベット語訳で伝わっている。この文献を典拠とする絵画の作例はシャル寺に見られるような、百話の全てについてそれぞれ一景で表した壁画や、仏画に複数の物語の主要場面を表す作例が知られており、ほかにも版画で物語の特徴を一景で表す例がある⁶⁴⁾。

図1がポタラ宮のふもとの印刷所で開版された木版画の例である。これは『ジャータカ百話』に基づく各ジャータカを一景で表した作例である。四角に区切られた枠の下には題字があり、「菩薩ルル鹿の姿」と書きこまれている⁶⁵⁾。枠の中の左側の台座には背当てを備えた台座があり、そこに前足を曲げて坐す鹿が描かれている。その右側には地に坐って合掌する男女が表されている。鹿の座の方が彼らよりも数段高いところにあり、人間の男女が鹿に対して帰敬する様子である。その背後に建物の一部と樹木が表されているため、この場面は『ジャータカマーラー』の結末に近い箇所、王が鹿を王宮に連れ帰り、そこで王宮の人々に鹿が説法をする一景を表したと考えられる。

なお、チベットからは離れるが、この構図に似通うのはインドネシアのボロブドゥール遺跡のレリーフである(図2)。これは第一廻廊欄楯上段(南西)にあり、同主題を表す連続した4枚のレリーフのうち一枚で、結末に相当する箇所である。図1と同じように左側の最も高い台座の上に前足を曲げて

坐す鹿がおり、その前には鹿よりも低い台座に坐す、おそらく王と王妃と考えられる男女が表されている。女性は両手を合掌しているようであり、男性は組まれた膝の上に左手を置き、右手は前に差し出しているようである。その周りには様々な物を手に持って跪いたり、足を組んで座ったり、立って供物を差し出したりする人々が描かれている。これもおそらく王宮の中の出来事で、鹿が王や王宮の中の人々を相手に法を説く場面を表したと考えられる。

この物語を典拠とする作例は各地に残るが、インドのバールフットやアジャンターの作例がよく知られている。ほかにも中国の敦煌莫高窟第257窟左壁の例があり、この壁画は物語の展開を様々なシーンに分けて詳細に描いた作例となっている。



図1 ショル版「ジャータカ百話」のうち「ルル鹿本生」



図2 ボロブドゥール遺跡 第一廻廊欄楯上段

2. チベットのタンカセットにおける作例解析

これまでに発表した翻訳と作例解析で、チベットにおける『ボーディサットヴァ・アヴァダーナ・カルパラター』に基づく複数の絵画セットについて明らかにしてきた⁶⁶⁾。それぞれの絵画セットの概要については既発表の作例解析を参照されたい。本稿でも「41幅のタンカ」と、同じ系統にある「ナルタンのタンカ」、および全く異なる系統にある「シトゥのタンカ」を解析する。

2.1 「ナルタンのタンカ」における同定

「ナルタンのタンカ」では、「右10」とされるタンカの左上部分に「黄金の鹿物語」の情景を示す（図3）⁶⁷⁾。これは右手で触地印を示す釈迦牟尼像の頭の左側に位置し、図中の数字は本稿の図の番号に対応している。

この物語の題字が示されるのは、画中に描かれる石碑を模した図で、図4の左端に白い石碑に赤字で「第31章金色の横腹を持つ者のアヴァダーナ」と記されることからこの物語を同定することができる⁶⁸⁾。

本稿の和訳で示したように、物語は釈尊がデーヴァダッタに関する過去の事績を比丘たちに示す場面から始まる。それが図5右下の、釈尊が比丘たちの前に坐し、右手を胸前に挙げて説法をする箇所である。釈尊と比丘たちの下に描かれる赤い壁には金色の文字で銘文が書かれているが、ほとんど判読できない。一部に「デーヴァダッタ」の文字があるため、物語の冒頭と最後の箇所の釈尊が比丘たちに対して説法する場面であると推測される⁶⁹⁾。

タンカの上部には鹿たちが人里離れた森で暮らす様子が表される（図5上）。樹木が連なる森があり、その手前に、白い身体を持つ鹿が四頭表される。その左には金色の身体をした主人公である黄金の鹿、すなわちスヴァルナパールシュヴァが、他の鹿よりもひときわ目立つ美しい鹿として表されている。その手前には川があり、その中から泡が立ちあがり人間の両足と両手が見えている。それに向かって水をかき分けて行くのがスヴァルナパールシュヴァで、川に入っておぼれた男を救い出す場面が表されている（図5中央）。左側の岸には裸の男が胸前で手を合わせて地に膝をつく姿勢で描かれているため、川



図3 「ナルタンのタンカ」「右10」のうち
「黄金の鹿物語」を表す部分



図4 「ナルタンのタンカ」「右10」部分図
題字(左)と王宮で金色の鹿が獅子座に坐し説法をする場面



図5 「ナルタン」のタンカ「右10」部分図

釈尊が弟子たちに過去生を語る場面（右）

鹿の群れが森に暮らす場面（上）

川でおぼれる男を黄金の鹿が救出する場面（中央）

から救い出された後の箇所を表すのだと考えられる。鹿たちの足元に赤字で銘文が書きこまれ、スヴァールナパールシュヴァが鳥の忠告を無視しておぼれた男を救出することが記される⁷⁰⁾。ただし鳥の姿は絵画中には見られない。

次の場面描写は、タンカの左端に描かれる、王宮の中に男女が向き合って話をしている箇所である（図6左）。右の女性は手を挙げて身振り手振りを交えて熱心に話すかのようなのであるが、これは王妃が夢の中で見た金色の鹿の姿を王に話す場面である⁷¹⁾。その右には（図6右）、中央に坐す王の周りに人々が集まり、その前には財宝が置かれている。これは、金色の鹿の夢を見たと言う王妃の話聞いた王が報奨を用意して、猟師に金色の鹿を捕えるように命令する箇所である⁷²⁾。

クティラカを先頭にして王は兵士を伴って鹿狩りに出かけるが、その先は図7に表される。図7の上は、王の軍隊とその道案内をするクティラカで、金色の鹿を指さすクティラカの左腕は手首のところで切断されている⁷³⁾。図7の左下は馬や象と馬車に乗った王が絵画の中心に向かって描かれている。その下の車両の中に鹿の姿が表されるため、これは王が鹿の行動に感嘆し、王宮に連れ帰った場面を表すと考えられる。王はこの鹿に自分の宝座を与えると、鹿は王宮の人々に対して説法を行う。図4には王宮の中の王座に坐した鹿が、合掌する王や王妃、大臣や比丘に対して説法をする姿が表されている。物語は再び図5右の釈尊の説法の場面に移る。釈尊が比丘たちに対して結末を語る場面である。

このタンカに関しては、銘文と絵図はテキストに基づいていると言えるだろう。銘文の内容は原文と同じであるが、使われる語句は同じではない⁷⁴⁾。また原文は偈文であるが、銘文は散文となっている。

2.2 「41幅のタンカ」における同定

「41幅のタンカ」セットの中で「右13」とされるタンカの右に本アヴァダーナが表されている（部分図は図8と図9）⁷⁵⁾。これまでの作例解析では、上記の「ナルタン」のタンカ」と「41幅のタンカ」と比



図6 「ナルタンのタンカ」「右10」部分図

王妃が夢の内容を王に語る場面（左）

王が報奨金を用意して獵師たちに鹿の捕獲を依頼する場面（右）



図7 「ナルタンのタンカ」「右10」部分図

クティラカの腕が切断される場面（上）

王が黄金の鹿を王宮に連れ帰る場面（下）

較すると、まるでそのまま複写したかのような作例が多く見られたが、本物語の描写では異なる点が複数あり、さらに「41幅のタンカ」のみに描かれ、「ナルタンのタンカ」に欠ける場面がいくつか見られる。

図8を上から見ていくと、図の左上には川が描かれており、その中におぼれる男とそれを助け出す金色の鹿が表される。図5と同じシーンであるが、図8には右岸上に黒い姿をした鳥が描き込まれており、金色の鹿に忠告する場面を明確にしている。その下には腰布のみを着ける男と後ろを振り返りするような姿の金色の鹿が表され、助け出された後で男が鹿と口約束をするシーンを表すと考えられるが、「ナルタンのタンカ」ではこの場面は同じ構図を持ちながら左右が反転して表されている（図5左上）。そのため黄金の鹿は男に対して首を背けるような姿勢を取る。その右は王の軍隊が馬や象に乗り込んで森に入り、黄金の鹿を見つけ出す場面で、その上には男性が一人、右手を差し出して黄金の鹿を指示する様子が描かれている。その右手は手首のあたりで切り落とされており、鳥の呪いによって腕が切断される様子を示し



図8 「41幅のタンカ」 「右13」
タンカ右上部分

ている。これも、「ナルタンのタンカ」と比べると(図7中央), 左右が反転して表されている。

図9では、上に王が軍隊とともに黄金の鹿を連れて王宮に帰る場面が表されており、数頭の馬によって車両が引かれるが、そのうちの一つに黄金の鹿が乗っているのが見える。このシーンも図7と比べると、ほとんど同じ構図で左右が反転して表されている。その下には題字を示す石碑があり、さらにその下には王宮の中に黄金の鹿が坐し、王や大臣、女性たちにも教えを説く様子が表される(図4に相当)。さらにそれらの下の左側には、王宮があり、中に男女が向き合って座っているのが見える。これは王妃が夢で見た黄金の鹿について王に話す場面で、同じ場面が図6の左に表されている。その右には王を囲んで獵師たちが集まり、目の前に財宝が置かれている。これも同じく、図6の右にあり、この二つの場面は細密さの違いはあれ、ほぼ同様に描かれている。

「ナルタンのタンカ」と「41幅のタンカ」の画面描写の数箇所が左右反転して表されている理由は、おそらく中央の釈尊坐像に対するバランスを重視して、中央に向かって行くことを優先した結



図9 「41幅のタンカ」 「右13」
タンカ右下部分



図10 「シトウのタンカ」(蔵訳第28章から第33章を表すタンカ)

中央部拡大図「黄金の鹿物語」

果であろうと推測される。「ナルタンのタンカ」は釈尊坐像の左に、「41幅のタンカ」は右に本アヴァダーナを配置するため、同じ構成の図を表す際に馬車や人が中央に向かうようにをれぞれ反転させたと考えられる。

2.3 「シトウのタンカ」における同定

「シトウのタンカ」では第28章から第33章までが描かれるタンカに表される(図10: タンカの中央部)。本タンカにおいて物語は図の左下の崖の下に川が流れる箇所から始まる。川には水の流れの筋や小滝を描き、それが急流であることを示しており、その中ほどに男性の上半身が見える。その様子を右岸の崖の上から黄金の鹿と鳥が見下ろしている。その右下に目を移すと、黄金の鹿が男に首を差し伸べており、さらにその上には黄金の鹿に男がまたがっているのが表されている。その上には白い身色の鹿が四頭描き込まれ、その右に金色の鹿が他より一段と大きく表され、傍らには助け出された男が合掌している。ここまでが、金色の鹿がおぼれた男を助け出し、居場所を明かさないと約束をしたところまでを表している。

物語は図の右端に移る(図10右下)。樹木を背景に王宮が表されており、その宮殿の左の窓に男女が向き合う場面と、その左の宮庭に一人の男が腕を挙げて王に話をするような様子が示される。これらは、王妃が夢で見た黄金の鹿の存在を王に話す場面と、クティラカが王に鹿の居所を知っていることを話す場面であろう。その左上には馬に乗った王と、甲冑を着けて幡を掲げた兵士たちが森の中に入って行く様子を描き、その上に黄金の鹿とそれを指し示すクティラカが立つ場面を描く。彼の掲げた右腕は手首のところで切断されている。その次のシーンは図の中央よりやや右下にあり、四人の男性に担がれた神輿に黄金の鹿を乗せて王宮に運ぶ様子を表している。最後に右に表される王宮に戻り、王宮の右の窓には黄金の鹿が座に坐して目の前の人々に教えを説く様子が表される。

3. まとめ

今回も「ナルタンのタンカ」については、ニューデリーのチベットハウス所蔵のタンカを参照した。本タンカには題字の他にも場面を説明する銘文が書き込まれているため、絵で表現された場面を正確に

同定することが可能である。銘文は剥落や加筆が数箇所に見られ、綴りの不明な点や、文法的に正確でない箇所も見られるものの、判読可能な箇所は物語の同定の手掛かりとなっている。

「黄金の鹿物語」を表す絵図では「ナルタンのタンカ」と「41幅のタンカ」において興味深い特徴が見られた。それは同じ構図の絵を左右反転して表すことで、おそらく中央の釈迦牟尼坐像との関係で中央に向かうように表したのだと考えられる。チベットで現在でも行われている絵画の制作方法で、下絵を描く際に補助線を格子状に引き、それに従って正確に手本を描き写す方法がある。こうした場合は絵のサイズは格子の辺の長さを変えることで変更できるが、構図としては同じ絵が複製される。この両タンカに関しても似たような方法を取って描かれたと推測していたが、本アヴァダーナに関してはあてはまらないようである。「ナルタンのタンカ」と「41幅のタンカ」は様式や構成が似通っていることは判明しているが、成立年代と制作方法は完全に明らかになっていない。また「ナルタンのタンカ」は版画と肉筆画の両方があり、いずれが先立つのか判明していない。本稿で指摘した左右反転の図が明らかになったことで制作過程や方法を再考することが課題となった。

様式の点では、「ナルタンのタンカ」と「41幅のタンカ」は類似しており、「シトゥのタンカ」は全く異なることはこれまで発表してきた絵図と同じである。いずれのタンカも原文の内容に基づいて表されている。

註

- 1) サンスクリット語原文からの翻訳は引田弘道と紅林直也が中心に行い、蔵語訳と絵画解説は大羽が行った。
- 2) その他 No. 359 *Suvaṇṇamiga-jātaka* 「金色の鹿前世物語」という同じような題名のジャータカがあるが、内容が異なるので省略した。
- 3) 同じ経で、明本を底本とし、宋本と元本で対校したものは大正3、453b-54aを参照。ところで、『今昔物語』巻5（375頁）の注によると、この「身色九色鹿、住山出河辺助人語 第18」という題の物語は、その出典が『法苑珠林』巻50（大正53、666b-667a）であり、さらにその原拠は『九色鹿経』であると指摘されている。『今昔物語』は『法苑珠林』を書き直している印象があるが、『法苑珠林』は明らかに『九色鹿経』を引用している。
- 4) ... yo suvaṇṇamigaṃ ācikkhissati tassa saddhiṃ sahaṣṣatthavikasuvaṇṇanagaṅṭakhehi taṅ ca hatthiṃ tato va uttarim dātukāmo hutvā... (p. 257, ll. 9-11)
- 5) Saccam kir' evam āhaṃsu: narā ekacchīyā idha,
kaṭṭham viplāvitam seyyo na tv-ev' ekacchīyo naro ti. (No. 7, p. 259)
- 6) ... attānaṃ ādim katvā sabbasattānaṃ abhayadānaṃ varaṃ gaṇhi. (p. 262, l. 2)
- 7) ekaṃ taṃ varaṃ yācāmi mā maṃ kassaci pāvada. (8cd)
- 8) ... navāmbu-pūrṇayā mahāvegayā nadyā hriyamānasya puruṣasyākranditaśabdam śuśrāva. (p. 167, ll. 21-22)
- 9) āvṛtya mārgaṃ vapuṣātha tasya mām āśrayasveti taṃ abhyuvāca /
trāsāturatvāc chrama-vihvaṅgaḥ sa pṛṣṭham evādhiruroha tasya // (No. 5, p. 168, ll. 12-13)
- 10) ... gaccheti taṃ sa visasarja nivedya mārgaṃ // (No. 7, p. 168, l. 19)
- 11) tad-ājñā-saṃpradānena kartum arhasy anugrahaṃ /
viniyoga-kṣamatvaṃ me bhavān yatrāvagacchati // (No. 10, p. 169, ll. 5-6)
- 12) yatas tvāṃ bravīmi kṛtam idam anusmaratā bhavatā nāyam arthaḥ kasmaicin nivedya īdṛṣṇasmi sattva-viśeṣeṇottārīta iti /
(p. 169, ll. 10-11)
- 13) ... ruruṃrgaṃ ... mānuṣeṇa vacasā dharmam deśayantaṃ... (p. 169, l. 25- p. 170, l. 1).
- 14) dāridrya-duḥkha-gaṇanā-parikhinna-cetāḥ smṛtvā ca taṃ ruru-mṛgasya mahopakāram /
lobhena tena ca kṛtena vikṛṣyamāṇo dolāyamāna-hṛdayo vimamarśa tat tat // (No. 17, p. 170, ll. 17-20)
(貧乏の苦しみを考えると心痛められ、ルルという鹿の大きな助けを思い起こしては、貪欲さとその恩によって引き裂かれながら、心が揺れて、あれこれと考えた。)
- 15) ... tena puruṣeṇādeśyamāna-mārgas (p. 171, l. 6)
- 16) tasyonnāmayato bāhuṃ mṛgasamdarśanādarāt /

- prakoṣṭhān nyapatat pāṇir vinikṛta ivāsinā // (No. 18, p. 171, ll. 12–13)
 āsādyā vastūni hi tādrśāni kriyāviśeṣair abhisamṣkṛtāni /
 labdha-prayāmāṇi vipakṣa-māndyāt karmāṇi sadyaḥ phalatām vrajanti // (No. 19, p. 171, ll. 14–15)
 (鹿を示す意図から、彼が腕を上げると、
 剣で切られたかのように、(彼の)手首から手が落ちた。)
 (というも、このような素晴らしい業によって清められた事柄に出会うと、
 (清業を)邪魔する(業が)ないことから、(業の)欠乏状態となり、すぐさま実を結んでしまうから。)
- 17) asmin nirjana-sampāte niratam gahane vane /
 asāv atra mṛgo 'stīti ko nu te mām nyavedayat // (No. 23, p. 172, ll. 3–4)
- 18) satya eva pravādo 'yam udakaughagatam kila /
 dārv eva varam uddhartum nākṛtajña-matiṃ janam // (No. 24, p. 172, ll. 9–10)
- 19) alam alam mahārāja hatam hatvā (p. 173, l. 10)
- 20) dayāṃ sattveṣu manye 'ham dharmam saṃkṣepato nṛpa /
 hiṃsāsteya-nivṛtyādi-prabhedam vividha-kriyam // (No. 38, p. 174, ll. 9–10)
- 21) 「誰能救得我者。我与作奴。」(175b)
- 22) 「此黒頭虫，都無恩義。勿須救拔。若得離難，必害鹿王。」(175b)
- 23) 鹿はきれいな毛並みをしており、その存在を知った獵師たちは鹿を殺して皮を剥ぐだろうと恐れたから。
 (175b)
- 24) 夢中思惟。我作此夢，定是真實。(175c)
- 25) 其人引前，往鹿王所。(175c)
- 26) 「前被溺人，是背恩者。王不須救，不用我言。」(175c–176a)
- 27) 「金色鹿王，彼來者是。」(176a)
- 28) これは仏陀による弟子達への言葉としてある。「衆生若造，極惡業者，不待來生，今即見受。」(176a)
- 29) これは仏陀による弟子達への言葉としてある。「被溺之人，由不知恩，造惡業故。手指鹿訖，手即墮地」
 (176a)
- 30) 「王所遊處，山林曠野，悉施鹿王。我從今後，永斷殺生。亦令國人，不得遊獵。願諸有情，於諸住處，心無怖畏。」(176b)
- 31) 興味深いことに「一切世間，皆悉虛誑。唯有布施，忍辱慙愧，智慧之法，乃是真實。」(67a)と聖徳太子の
 「世間虚仮，唯仏是真」を髣髴とさせる文がある。
- 32) 「汝今不応，生怖畏心。我今入水，猶如草木。仮使身滅，要当相救。」(67a)
- 33) 「若念我者，当善撰口。」あるいは、「是故汝今，当善守護口。」(67b)
- 34) 「王即嚴駕，令在前導。」(67c)
- 35) 「所言鹿王，此即是也。」(68a)
- 36) 「我從今日，常相歸依。」、「從今以往，施諸鹿群，無所畏樂。我今終身，願為弟子。若汝來世，成無上道，願先濟度。」(68b)
- 37) 「拳国人民，自今為始，不得遊獵，殺害為業。」(68b)
- 38) de Jong は vandyah (: phyag byar 'os 「賞賛されるべき」と読む。() 内のコロンの後の語は対応する蔵語訳の語で、必要と思われる箇所に原文のままの形で加えた。
- 39) 韻律は Śārdūlavikrīḍitam。
- 40) 第2偈から第50偈までの韻律は Anuṣṭubh。
- 41) 原文は, patyuh とするが、蔵語音写は satya であり、蔵訳は bden pa とあるので、「真實の力によって」と理解されている。
- 42) 原文は -ratnodarāsphāra- であるが、de Jong に従って -ratnodara-sphāra と読んだ。
- 43) 蔵訳では、rdśi ma 「まつげ」
- 44) 蔵訳では、byu ru'i 'khri shing rva co 「珊瑚の蔓のような角」
- 45) 原文は veṇumālīnyah。蔵語音写は benamālīnyah であり、蔵訳は lbu ba とあるので、「泡がブクブクと連なる」となる。de Jong は蔵訳をもとに phenamālīnyah とする。
- 46) この偈は BI, Vaidya 本になし。de Jong は蔵語音写、蔵語訳から以下のサンスクリットを再構築する。

tatrāpaśyat pravāheṇa hrīyamāṇaṃ mahīyasā /
sa śatrubhir jale baddhaṃ kṣiptam ākrandinaṃ naram //

- 47) 原文は *dīrghadr̥ṣṭim* であるが、ここでは de Jong に従って、*dīrghadr̥ṣṭir* (ring du mthong ba yis) とした。
- 48) 原文は *atārata* であるが、文法的に問題がある。de Jong に従って *atārayat* (: thar bar byas) と読んだ。
- 49) Ruru (p. 256, ll. 23–25) に, “... api kho pana ‘asukaṭṭhāne nāma kañcanamīgo vasatīti’ dhanakāraṇā maṃ rañño vā rājamahāmattassa vā mā ācikkhā” ’ti āha.
- 50) 原文の *aṅkād* iva *mrgāṅkasya* *nirgato rāhuśaṅkayā* という音の連続が見られる。
- 51) 原文は *prīto* であるが、ここでは de Jong に従って *prītyai* (: mdśa’ slad) と読んだ。
- 52) 原文は *nicitācalaiḥ* であるが、意味がいまひとつとりにくい。ここでは *nicitā calaiḥ* と読んだ。蔵訳は以下となるため、*nicita acalaiḥ* と理解している。ri yis (acalaiḥ) rgyas pa yi (iyatī) // ’gro ba ’di (jagatī) rnyed (nicita) mnam par bcal (vicitā) / (山が連なるこの世界を探索した)
- 53) 原文は *labhyas* であるが、ここでは de Jong に従って *labdhas* と読んだ。
- 54) 原文は *dadad-bahutaraṃ dhanam* であるが、文法的にはいまひとつすっきりしない。ここでは *dadan bahutaraṃ dhanam* と読んだ。
- 55) 原文には *kanakasārāṅga sārāṅgaḥ* (: gser gyi ridags ridags) と音の連続が認められる。
- 56) 原文は *samhāreṇa na tṛpyate* であるが、蔵訳の音写語に従った de Jong に従って、*yasya prāṇas tvayārpitah* (: gang la srog ni byin pa) と読んだ。
- 57) 原文は *saṃghapātakaḥ* (サンガを墮落させる) であるが、意味をなさない。ここでは de Jong に従って *saktapātakaḥ* (: sdig la chags pa) と読んだ。
- 58) Viṣṇu Purāṇa (NAG Publishers, Delhi) v. 9. 30 に, *attam yathā vādavavahnināmbu hima-svarūpaṃ parigrhya kāstam / himācale bhānumato ’mśu-saṃgāj jalatvam abhyeti punas tad eva* // (海の火に食べられた水が、雪山の上に投げ出されると元の雪の状態をとり、太陽の光線にふれることより、それは再び水の状態となるように。) とある。注では「海の水が *vādava* という名の火によって食べられる、つまり焼かれると、海の火にある太陽光線の管よりなるその風によって、投げ出される、つまり雪山の上に投げ捨てられると、元の雪の状態をとっているが、夏に太陽の光線に触れることより、再び水の状態をとるように。」とある。本文 *pāda b* の *kāstam* の解釈は困難であるが、水の循環を表現していることは確かであろう。
- 59) 原文は *dūre vyadarśayat* であるが、de Jong は蔵語の音写と訳から *dūrād adarśayat* (: ring nas bstan 「遠くから指し示した」) と読むべきとする。
- 60) 原文は *so ’yam* であるが、ここでは de Jong に従って、*so ’ham* と読む。
- 61) 原文は *sukṛticitam* であるが、de Jong は蔵訳に基づいて、*sukṛtocitam* (: legs spyad la ’os 「善行に適した」) と読むべきとする。この読みの方が韻律的にすっきりする。
- 62) 韻律は *Nardataka* であろうが、最後の *pāda d* は18音節もあり、この韻律にそぐわない。恐らく最後の *-rucirah* は *-rucih* であろう。
- 63) 第38章の和訳および作例解析は、引田、大羽 (2017) を参照されたい。
- 64) 前註に同じ。
- 65) “Sems dpa’ chen po ri dvags ru ru’i gzugs”
- 66) 引田・大羽 (2015) 参照。
- 67) 絵画の全体は引田・大羽 (2018) 作例解析の図1を参照。
- 68) “Yal ’dab sum cu rtsa gcig pa gser logs gi rtogs brjod”
- 69) “... lhas sbyin ...” ただし、デーヴァダッタの正しい綴りは *lhas byin*。
- 70) 銘文にあるのは判読可能な限り以下の通り。“*sngon nags seb na ri dvags gser logs zhes pas chom ku ... bcings pa chus khyer ba bya rog gi btang snyom zer yang snying rjes ma bzod pa ra yi thag pa nas drang te skam sar b ... cing kho bo’i gnas tshul ... zhes pa /*” 「昔、森の中に黄金の鹿という者が、泥棒のク〔ティラカ〕が縛られて水に流されていたのを、鳥の捨て置くようにとの忠告にもかかわらず、慈悲の耐えられない蔓の綱で引かれたようになって、岸に……したときに、〔その男は〕経緯を……こと」とある。原文第13偈にも同様の記述が見られる。ただし、原文後半の蔵訳 (カッコ内梵語) は次のようになっている。“*Br̥tse ba’i (kr̥pā) zhags pas (pāśa) dbang du byas (vaśīkr̥taḥ) /* 「憐みという名の羅索によってとらえられて」とあり、内容は同じであるが、銘文の語句は原文と一致しない。

- 71) 建物の下部に一部銘文が見える。“... mo rgyal po ... rmi lam ...”「……〔妃〕, 王……夢……」
- 72) 銘文にあるのは判読可能な限り以下の通り。“rgyal pos sngon pa la nor mang du byin kyang ma rnyed par sngar gyi chom ku ... s te ston zer ba /”「王は以前に財宝を多く与えたのにもかかわらず見つけることができなかったのを、かつての盗人のク〔ティラカ〕がそれを見たと言うこと」
- 73) 銘文にあるのは判読可能な限り以下の通り。“rgyal po'i dbung tshogs ri dags dan nye par sleb pa'i ri dvags ... dag zhan rnam srog las skyabs pyir rang nyid gcig por yong kun pos bstan pas bya rog dmad mas lag pas la bral ba /”「王の軍隊が鹿に近よったところ、鹿……ほかの者たちの命を救うためにたった一人でやって来た〔。〕ク〔ティラカ〕がそれを指し示した時、鳥の呪いによって〔クティラカの〕手が切断されたこと」
- 74) 註70)を参照。
- 75) 絵画の全体は引田・大羽(2015)作例解析の図1を参照。

参考文献

- Forty-one Thangkas from the Collection of His Holiness the Dalai Lama: Past Lives of the Buddha.* 1980. Paris: Editions Sciaky.
- 田中公明『チベット仏教絵画集成』第3巻, 臨川書店, 2001年, 60頁。
- 引田弘道・大羽恵美「『ボーディサットヴァ・アヴァダーナ・カルパラター』第31章, 34章和訳」『愛知学院大学人間文化研究所紀要 人間文化』第30号, 2015年, 240-213頁。
- 引田弘道・大羽恵美「クシャーンティ・アヴァダーナ『ボーディサットヴァ・アヴァダーナ・カルパラター』第38章和訳一」『愛知学院大学文学部紀要』第47号, 2017年, 103-117頁。
- 引田弘道・大羽恵美「カーシースンダラ物語『ボーディサットヴァ・アヴァダーナ・カルパラター』第29章和訳」『愛知学院大学人間文化研究所紀要 人間文化』第33号, 2018年, 93-116頁。
- 頼富本宏・宮坂宥明監修『西藏図像聚成 ショル版八千頌般若経図像集』東京, 四季社, 2001年。

図版出典

- 1 頼富・宮坂編 前掲書402頁
- 2 筆者(大羽)撮影
- 3 筆者(大羽)がTibet House New Delhiにおける現地調査で撮影した画像を画像処理して作成
- 4 図3部分図
- 5 図3部分図
- 6 図3部分図
- 7 図3部分図
- 8 Sciaky版(Forty-one Thangkas 1980) 通し番号13の画像を編集
- 9 同上
- 10 田中前掲書掲載の図を編集して作成

本研究はJSPS 科研費基盤研究(C)「アヴァダーナとパンニャーサ・ジャータカの起源と流布に関する研究」(平成30-32年度, 課題番号: 18K00067, 代表: 引田弘道)および、「仏教説話図の図像学的研究—アヴァダーナを中心として—」(平成30-33年度, 課題番号: 18K12240, 代表: 大羽恵美)の成果の一部です。